

# 漁海況月報号外

平成18年1月1日～12月31日

静岡県水産試験場  
(電話 054-627-1815)

静岡県水産試験場伊豆分場  
(電話 0558-22-0835)

## 【黒潮流路】

図1と表1に黒潮流型の区分と近年の経過を示し、図2には平成18年1～12月における月別の前半、後半の黒潮流路を示す。

潮岬以西の黒潮は、1月に九州の都井岬沖で小蛇行が発生し、2月に九州東方沖で規模が拡大し、3月には四国の足摺岬沖まで離岸傾向となり、4月には幾つかの小冷水渦となつて四国沖を東進した。九州東方沖では5月下旬に再び小蛇行が形成され、7月まで九州東岸～四国沖では離岸傾向となった。その後は接岸傾向で流れたが、11月後半には九州東岸で大きく離岸し、12月には九州東岸～四国の足摺岬にかけて離岸傾向で流れた。

潮岬以东の黒潮は、2月前半までは小規模な変動を伴いつつも遠州灘沖 33°N から八丈島と三宅島の間を流れるN型で経過し、2月後半には駿河湾沖で小蛇行し一時的にB型となった。その後、小蛇行の東進により3月から4月前半はC型、4月後半から8月は再びN型で経過し、この間、5月から6月は遠州灘沖 33°N 付近から三宅島付近を流れる安定したN型であった。9月には小蛇行が遠州灘沖から伊豆諸島海域を東進し、黒潮はB型からC型へと短期間で変化し、10月までC型で経過した。その後、小蛇行は規模を縮小しつつ東方へ移動し、黒潮は11月にはD型を経てN型へと移行した。

昨年のA型、C型の蛇行流路とは異なり、平成18年はおおむねN型基調の直進流路で経過した。

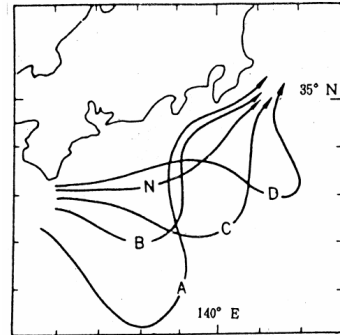


図1 黒潮流型の区分  
(海上保安庁海洋情報部より)

(資料：海洋速報 (海上保安庁) ・一都三県漁海況速報)

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成元年	B C C C C DW C N N N N N N N N N N N N N N DN B A A A											
2年	A A A A A A A A A A A A A A A A A AC C C C CD											
3年	C C C C C C C C C C CD C C C C C C D NN N N N N N N N											
4年	C DC N N N N N BD C DN N N N D N N N N NC C N N N											
5年	N N N N N N B B BC C C C C C C C C N B C D N N N N N											
6年	B C D N N N C C NN N N N B BN N N N N N N N N N N											
7年	NN N N N N N N B B B C C C D D NN N N N N N N N N BC C CD											
8年	C D D D W D N N N N N N N N N N N N N N N B C D N											
9年	N D D D C C C CW D ND N D C CNC D W N C D N N N B C											
10年	D C N N D N NW N N N NB B B C C C C C N N BC C C C C											
11年	CW W WB C C C C N N N N N N N N N BN B B B C C C											
12年	C C CW W W WB B BC CW WB C C C C C C C C CW CW CB B											
13年	C C C C CD C C C WN B C C C C C WB BC C C CD DW WD DN C											
14年	N N N N N N N N N NB N N N N N N N N N N N N N N											
15年	N N N N N N N D NW WN B BC D N N N N N N N N N N											
16年	N N N N N N N N N NA A A A A A A A A A A A A A A											
17年	A A A A A A A A A A A C C C C C C C D DN N N N N											
18年	N N N NB C CWC CN N N N N N N N N BN C NC C D DN N N											

\*静岡県水産試験場一部改変

表1 黒潮流型一覧表

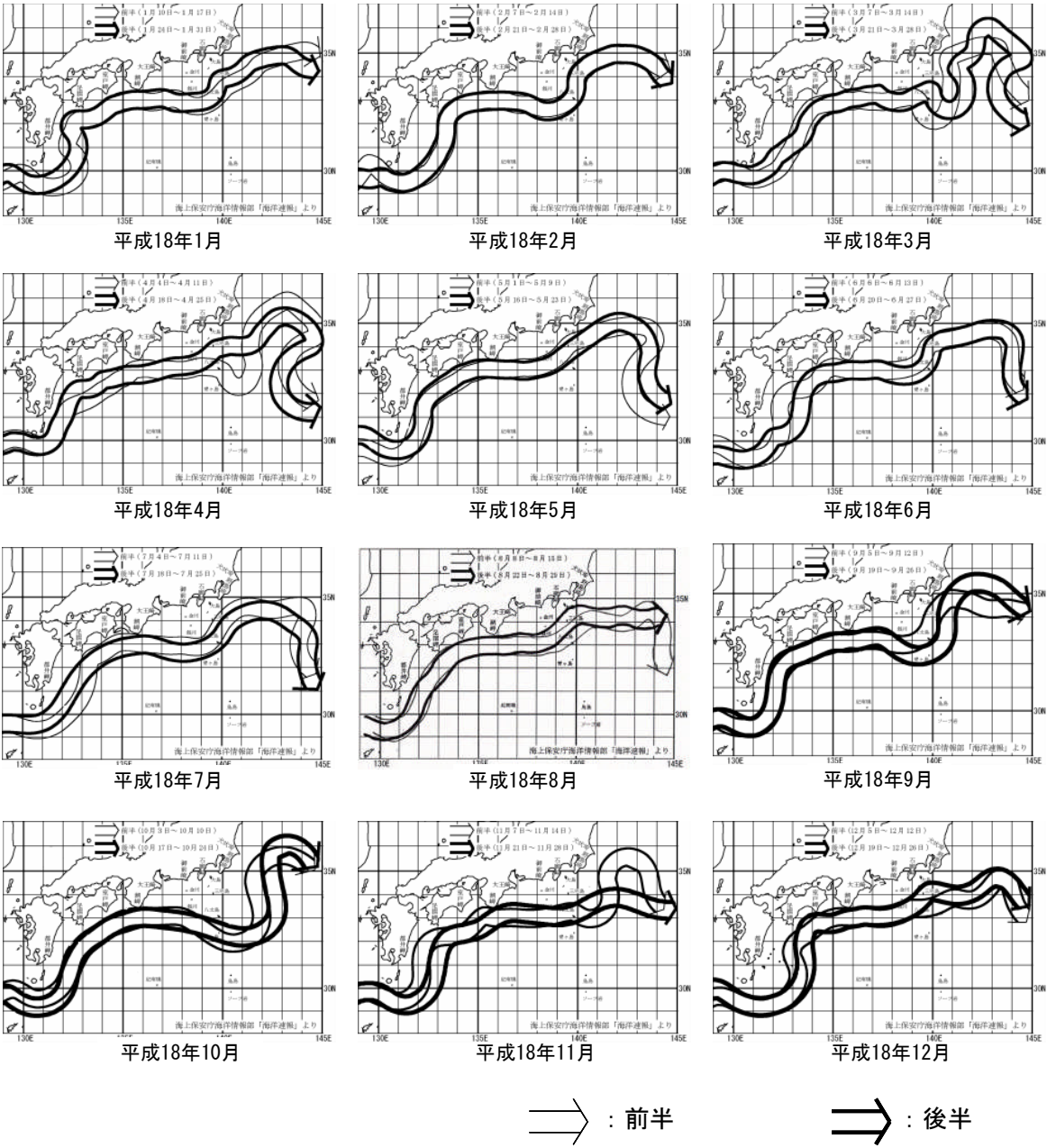


図1 黒潮流軸の変動 (海上保安庁海洋情報部「海洋速報」より)

## 【県下沿岸域】

図2に平成18年1～12月の沿岸水温の変化を旬別に示した。

1月から8月中旬の沿岸水温は、おおむね、低め基調の平年並み～低めで経過し、この間、黒潮のB型からC型への短期的な流型変化に伴う暖水波及により、3月には相模湾側を中心に平年よりもやや高めとなった。また、4月下旬には伊豆諸島北部海域で黒潮が大きく接近し、駿河湾を中心に強勢な暖水波及がみられた。一方、5～6月は黒潮が安定したN型となり沿岸への暖水波及はほとんどなく、さらに7月には黒潮が離岸し沿岸水温は平年に比べ3℃以上低めの水温を観測するなど、水温の低い状況が継続した。8月下旬以降は、黒潮の短期的な小蛇行の通過や流型変化に伴い、沿岸水温は、高め基調の平年並み～高めで経過した。

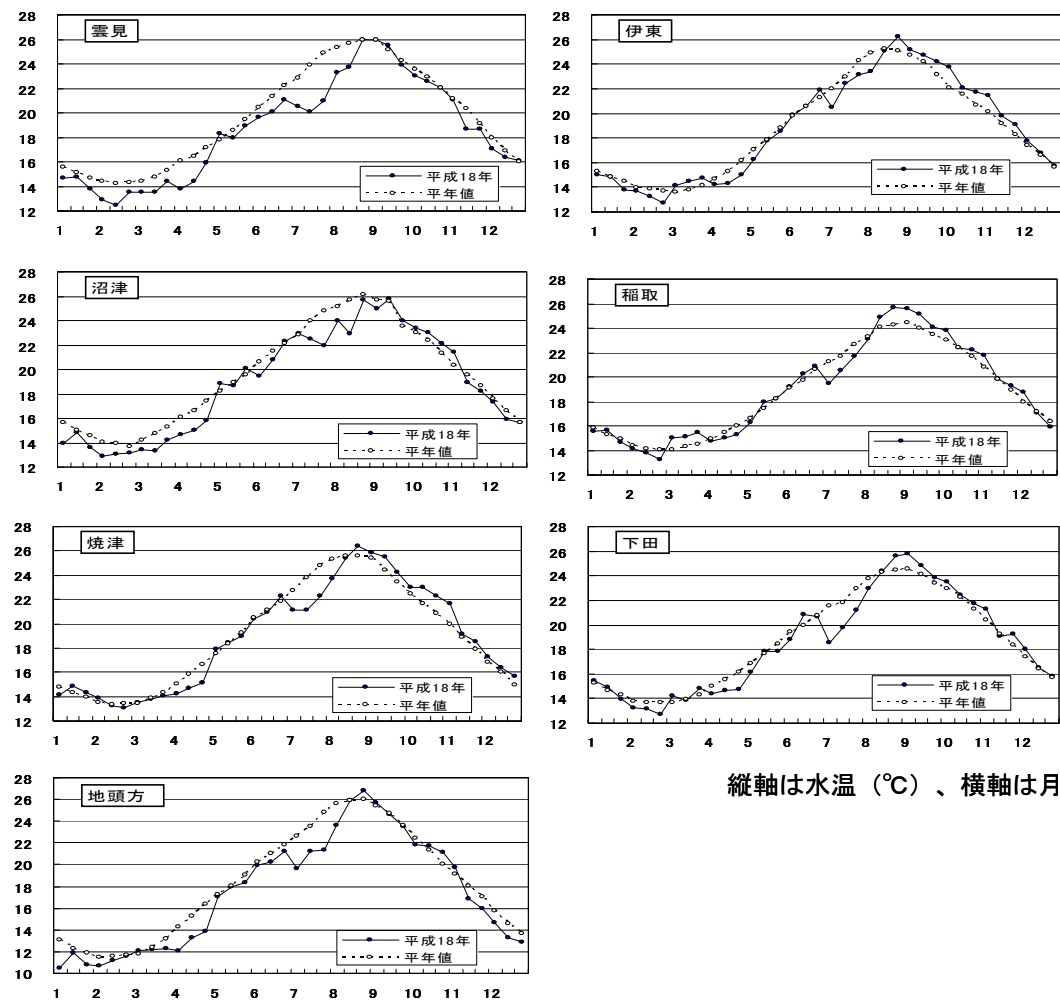


図2 平成18年1～12月の旬別沿岸水温の変化

## 【サバたもすくい棒受網】

平成18年の伊豆諸島海域におけるたもすくい漁は、1月12日から三宅島周辺でゴマサバ主体の操業が開始された。3月上旬まで、三宅島周辺海域の水温は18℃台で安定し、1夜1隻平均20トン以上のまとまった漁獲が続いた。黒潮は、漁期当初には遠州灘沖33°N付近を東進し八丈島と三宅島の間を流れる離岸傾向のN型で推移したが、3月中旬以降更に離岸しC型となり、漁場水温が15～16℃に低下し、漁況は低調となった。4月中旬以降、黒潮の接岸により漁場水温が上昇し、下旬には20℃台となり、漁模様は回復した。

一方、マサバは1～3月には、ほとんど漁獲されなかったが、4月に入り、三宅島周辺海域でゴマサバに1割程度混獲された。4月下旬には、黒潮の接岸により、伊豆諸島北部海域に17～18℃の暖水が波及し、利島や大室出でマサバ主体の漁場形成がみられ、1夜1隻平均10トン以上の漁獲が5月中旬まで続いた。漁獲されたマサバは、小型魚で成熟していたため単価が安く、5月下旬からは三宅島周辺海域でのゴマサバを対象とした操業となり、以後、三宅島周辺海域が主漁場となった。

1～6月の静岡県・千葉県・神奈川県の水揚量は、マサバが421トンと昨年(141トン)を上回ったものの、依然として低水準であった。一方、ゴマサバは2,209トンで、燃料費の高騰や単価安による出漁隻数の減少などにより、昨年同期3,752トンを大きく下回った。マサバは、30～35cm(尾叉長)の2歳魚(2004年級群)が漁獲の大半を占めた。ゴマサバは26～29cmと31～32cmにモードをもつ2歳魚(2004年級群)が漁獲の主体となった。

静岡県船による棒受網の漁場は、8月～9月上旬に大室出などに一時的に出漁がみられたが、7月以降、三宅島周辺海域を中心に形成された。漁獲されたゴマサバは、26～40cmと幅広い組成であったが、28～29cmモードのものやや大型の30～32cmモードのいずれも2歳魚(2004年級群)と思われるものが主体であった。

7～10月における各月の1夜1隻当りの漁獲量は、27.6トン、22.1トン、19.0トン、14.7トンと、漁期の経過とともにやや低調となったが、11月には27.2トン、12月には29.8トンと再び好調となった。また、11月下旬後半から三宅島周辺海域では、ゴマサバに混じりマサバ(29～36cm、31・32cmモード)がわずかに混獲された。

静岡県における7～12月のたもすくいと棒受網によるサバ類の水揚量はマサバ1.4トン、ゴマサバ4,768トン(昨年同期:マサバ0トン、ゴマサバ5,011トン)をやや下回った。

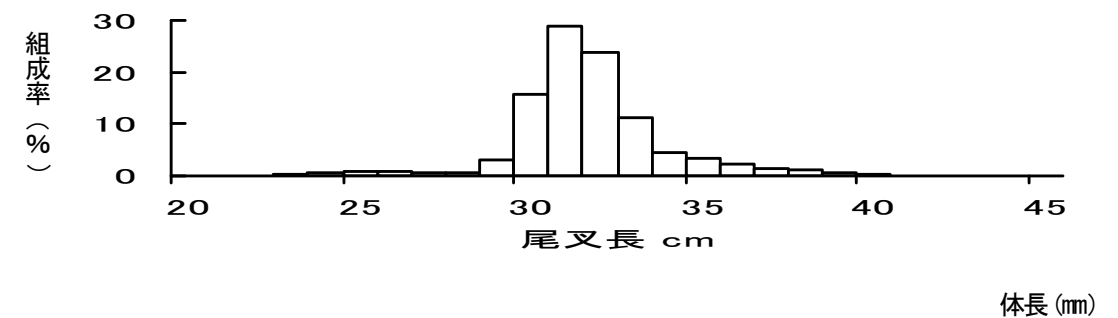


図4 平成18年1～6月のたもすくいによるマサバの尾叉長組成

**【サクラエビ船曳網】**

平成18年の春漁は、3月27日夜～6月5日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は22日、漁獲量は1,337トンで、漁場は主に沼津沖～由比沖に形成された(昨年の出漁日数は21日、漁獲量は1,268トン)。漁獲されたサクラエビの平均体長は36.8mmで、昨年(36.1mm)より大きかった。

秋漁は10月30日夜～12月24日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は14日、漁獲量は491トン、漁場は主に三保沖～焼津沖に形成された(昨年の出漁日数は14日、漁獲量は457トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長29.4mmの当歳エビ(昨年は31.9mm)と平均体長40.8mmの1歳エビ(昨年は41.0mm)の2群で構成された。

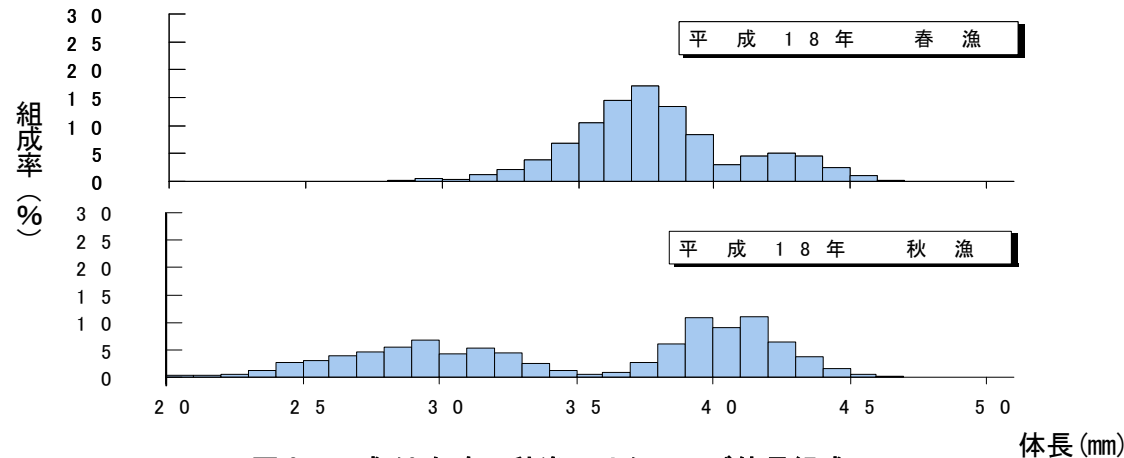


図3 平成18年春・秋漁のサクラエビ体長組成

**【竿釣近海カツオ】**

・水揚量と魚価

平成18年の静岡県主要5港(沼津、清水、焼津、小川、御前崎)における近海竿釣り水揚量は1,771トンで平成17年の4,195トンを大幅に下回り、過去5か年平均(4,230トン)の42%であった。

魚価は370円/kgで平成16年の305円/kgを上回った。

・漁況(漁場形成と魚体)

近海竿釣り船QRYによれば、静岡県船の漁況は、おおむね下記のとおり推移した。

- 1月 中旬から今年の操業を開始した。
- 2月 19°～26°N、136°～141°Eで特大、大、中、特々大、小カツオを漁獲した。
- 3月 20°～23°N、139°～141°E、25°～28°N、139°～145°E及び32°N、140°E付近で中、大カツオ、キメジ、特大、小、極小、特特大カツオを漁獲した。
- 4月 31°30'～33°20'N、139°30'～141°E付近で、キメジ、極小カツオ、小キハダ、小、中、チン、大、特大カツオ、ビンナガを漁獲した。
- 5月 30°～34°N、138°～143°Eと25°～27°N、141°E周辺海域で小、極小、中カツオ、ビンナガを主体に漁獲した。
- 6月 30°～34°N、138°～144°Eで大、特大、小、中、極小カツオ、中、小ビンナガを中心に漁獲した。
- 7月 35°～39°N、141°～151°Eで小、中、極小、大カツオを中心に漁獲した。

- 8月 36°～40°N、144°～150°E及び34°N、140°E付近で中、小、大、極小、特大カツオを中心に漁獲した。
- 9月 36°～40°N、144°～147°Eで中、大、小、特大、極小カツオを中心に漁獲した。
- 10月 三陸東沖で特特大～チンまで様々なサイズのカツオを漁獲した。
- 11月 津軽東沖～三陸東沖で大～チンまで様々なサイズのカツオを漁獲した。

年月	水揚量(トン)	水揚隻数	水揚/隻(トン)	平均単価(円/kg)	主漁場と魚体(体長cm)
18年1月	29	1	29.3	257	
2月	539	25	21.5	283	小笠原諸島南西(42～86)
3月	302	20	15.1	400	小笠原諸島周辺(48～70)
4月	114	29	3.9	568	八丈島周辺(39～72)
5月	330	45	7.3	487	小笠原諸島～三宅島周辺(38～75)
6月	200	64	3.1	431	鳥島～三宅島周辺(33～78)
7月	65	15	4.3	242	八丈島～三宅島周辺(31～79)
8月	118	23	5.1	211	三宅島周辺(32～77)
9月	52	15	3.5	251	三宅島周辺(32～78)
10月	18	9	2.2	332	三宅島周辺(40～69)
11月	5	8	0.7	587	
12月	0	0	-	-	
18年計	1,772	254	7.0	370	
17年計	4,195	582	7.2	305	
5か年平均	4,230	535	7.0	352	

5か年平均：平成13～17年の平均

表1 平成18年竿釣近海カツオ水揚量等(県内主要5港)

**【まき網】**

1 マイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は22トンで、前年(13トン)の169%、平年(過去5か年平均：195トン)との0.1%と前年より多かったものの極めて低調だった。また、昨年と同様、9月の水揚が総水揚量の50%以上であった。

本年の小川港における総水揚量は208トンで、前年(198トン)の105%、平年(1,177トン)の18%と極めて低調であった。また、9月に水揚が集中し、総水揚量の70%以上を占めた。

本年の伊東港における総水揚量は3トンで、前年(35トン)の10%、平年(533トン)の1%以下と極めて低調だった。

2 カタクチイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は1,291トンで、前年(1,318トン)の98%、平年(1,183トン)の109%と、前年を下回り、平年を上回った。また、6～7月に水揚が集中し、総水揚量の約8割を占めた。

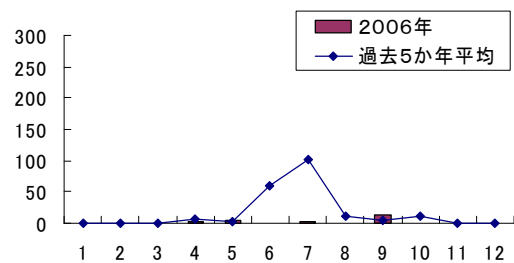


図5 静浦漁港マイワシ月別水揚量の推移

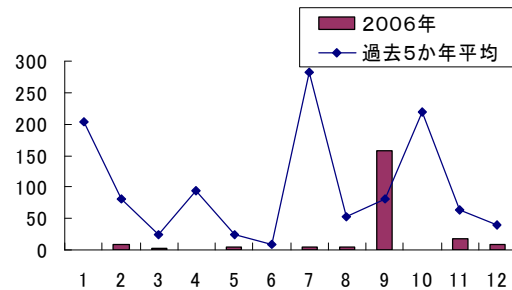


図6 小川港マイワシ月別水揚量の推移

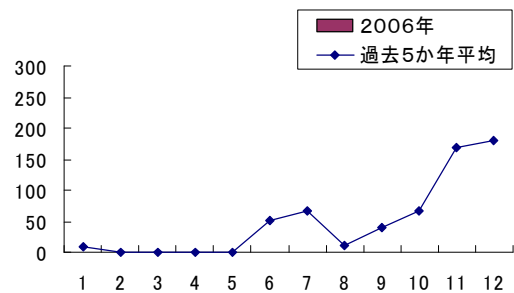


図7 伊東港マイワシ月別水揚量の推移

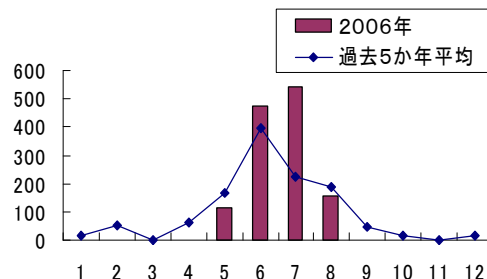


図8 静浦漁港カタクチ月別水揚量の推移

(注) 図5～7の縦軸は水揚量(トン)、横軸は水揚月

### 【シラス船曳網】

平成18年シラス漁は3月21日から始まった。3～12月の主要6港(静岡、吉田、御前崎、福田、舞阪、新居)における総水揚量は6,449トンで、前年(6,849トン)の94%と若干下回り、平年(5,577トン)を上回った。また、総水揚金額は4,037,287千円で、前年(4,806,523千円)の84%、平年(4,074,531千円)の99%と前年を下回り平年並みであった。平均単価は626円/kgと前年(702円/kg)の89%、平年(769円/kg)の81%であった。

1日1か統当りの水揚量の推移を月別にみると、3月は141kg(遠州灘150kg、駿河湾133kg)で平年(104kg)を上回ったが、4月には下旬に好転したもの129kg(遠州灘154kg、駿河湾99kg)で平年(309kg)を大きく下回った。5月は中旬までは200kg台で推移したが、下旬には400kgを超え、月全体としては327kg(遠州灘367kg、駿河湾228kg)で平年(306kg)を若干上回った。6月は上旬～中旬半ばまではおおむね400kgを超える好漁が続いたことから、月全体としては474kg(遠州灘563kg、駿河湾252kg)で平年(290kg)を大幅に上回った。7月は上旬に100kg台まで落ち込んだが中旬以降は500kgを超える好漁となり、月全体としては501kg(遠州灘611kg、駿河湾306kg)で平年(436kg)を上回った。8月は上旬に900kg、中旬には500kgを超える高い状態が続いていたこともあり、下旬は低調であったものの、月全体としては586kg(遠州灘715kg、駿河湾435kg)で平年(274kg)を大きく上回った。9月は上旬に100kg台と低調であったが、中旬以降は300～400kg台で推移し、月全体としては344kg(遠州灘380kg、駿河湾266kg)で平年(326kg)を若干上回った。10月は下旬に200kg台と低調に推移したが、上～中旬には300kgを超える好漁であったことから、月全体としては359kg(遠州灘411kg、駿河湾242kg)で平年(258kg)を大幅に上回った。11月は100kg台で低調に推移

し、月全体としては152kg(遠州灘150kg、駿河湾156kg)で平年(136kg)を若干上回る程度であった。12月は100kgを割る状態が続き、月全体としては78kg(遠州灘98kg、駿河湾58kg)で平年(95kg)を若干下回った。

水揚量の推移を月別にみると、3月の総水揚量は34トンで前年(40トン)の85%、平年(25トン)の136%と前年を下回り、平年を上回った。4月は、総水揚量は158トンで前年(983トン)の16%、平年(605トン)の26%と前年、平年ともに大きく下回った。5月の総水揚量は781トンで前年(1,009トン)の77%、平年(855トン)の91%と前年、平年ともに下回った。6月の総水揚量は1,421トンで前年(563トン)の252%、平年(711トン)の200%と、この数年で最も高かった。7月の総水揚量は894トンと前年(908トン)の98%とほぼ同じ、平年(1,127トン)の79%であった。8月の総水揚量は992トンと前年同期(1,102トン)の90%、平年同期(565トン)の176%であった。9月の総水揚量は883トンと前年同期(1,306トン)の68%、平年同期(787トン)の112%であった。10月の総水揚量は943トンと前年同期(815トン)の116%、平年同期(592トン)の159%と好調であった。11月の総水揚量は263トンと前年同期(64トン)の411%、平年同期(220トン)の120%であった。12月の総水揚量は80トンと前年同期(45トン)の178%、平年同期(76トン)の105%であった。

平均単価を月別にみると、4、5、12月は平年を上回ったが、それ以外の月は下回っており、特に6～8月は平年の40～60%台とかなり安値で推移した。

今漁期の特徴としては、継続した漁場形成があまりなかったこと、駿河湾より遠州灘で好漁であったことがあげられる。これは、黒潮がN型基調で推移した等により、駿河湾内へのシラス流入が断続的であったことが原因として考えられる。

平年：過去5か年平均

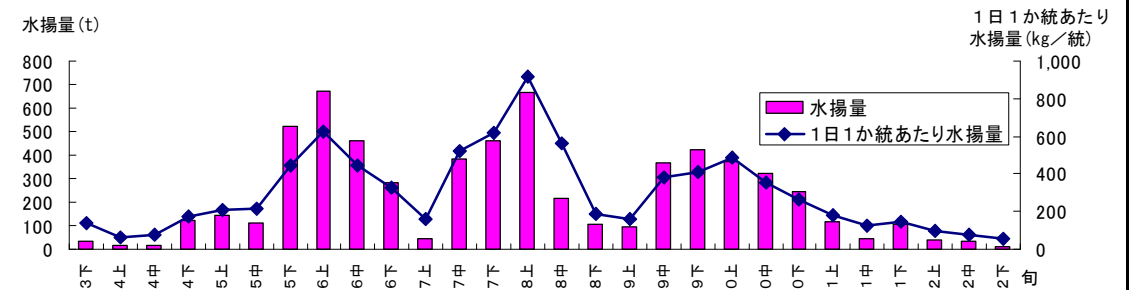


図9 平成18年主要6港旬別シラス水揚量と1日1か統当たり水揚量の推移

### 【定置網】

平成18年の伊豆半島東岸大型定置網8か統(伊豆山、古網、赤石、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津)の漁獲量は3,220トンで、これは多かった前年漁獲量5,610トンの57%、平年漁獲量(昭和57年～平成17年平均)3,884トンの83%であった。

漁獲量を月別にみると、最も多かったのは6月の585トンで、最も少なかったのは11月の78トンであった。1～2月はカタクチイワシの多かった前年の30%程度と低調で、3月はやや前年を上回ったが、4～5月はサバ類の多かった前年の半分以下と前年を大きく下回った。6～8月も前年を10～20%下回った。9月以降は前年の50%程度と前年を大きく下回り、特に11月は前年の23%と昭和57年以降のこの月の漁獲量として最も少なかった。

魚種別漁獲量の上位10種は以下のとおりであった。

- 1 サバ類(さばっこを除く): 1,118 トン(前年の51%、平年の132%)
- 2 マアジ(じんだを除く): 772 トン(前年の60%、平年の107%)
- 3 カタクチイワシ: 334 トン(前年の38%、平年の108%)
- 4 スルメイカ: 209 トン(前年の223%、平年の147%)
- 5 マルソウダ: 112 トン(前年の70%、平年の57%)
- 6 銘柄いなだ: 66 トン(前年の835%、平年の303%)
- 7 イサキ: 55 トン(前年の130%、平年の112%)
- 8 ウルメイワシ: 53 トン(前年の64%、平年の97%)
- 9 メアジ: 53 トン(前年の1,297%、平年の361%)
- 10 ブリ(銘柄ぶり): 43 トン(前年の49%、平年の78%)

ブリは、銘柄ぶりの漁獲量は43トン(5,317尾)で平年を下回り前年の半分以下であった。2月に1,724本、3月に2,613本入網し、魚体は3~4歳魚(2002~2003年級群)主体であった。また、銘柄いなだが4月と6月に集中的に入網したことにより66トンと前年及び平年を大きく上回り、銘柄わらさの漁獲量は39トンと平年を下回ったが前年の2倍近くとなった。これは2005年級群が銘柄いなだとして4月と6月に集中的に入網し、8月には2.5kg以上に成長して銘柄わらさとして集中的に入網したことによるものである。2006年級群である銘柄わかしの漁獲量は2.2トンと前年及び平年を大きく下回り、極めて低調であった。

マアジは、2~3月には前年及び平年を上回って漁獲され、1歳魚(尾又長の中心18~21cm)の他に2歳魚(尾又長の中心22~26cm)も多く漁獲され、6月まで4月を除き平年を上回る漁獲が続いた。マアジじんだは6~8月を中心に漁獲されたものの3.4トンにとどまり、前年及び平年の10%以下と極めて低調であった。8月以降は当歳魚中心で前年及び平年を下回る漁獲となり、9~11月は10トン以下で平年の30%以下の著しく低水準の漁獲が続いた。

サバ類(さばっこを除く)は、年間を通じてゴマサバが主体で、3月に前年及び平年を上回ったが4月には急激に減少した。5月には好調だった前年を下回ったものの平年を上回る漁獲に転じ、6~7月は前年及び平年を上回り、特に6月には321トンと昭和57年以降で最も多く漁獲された。8月は平年をやや下回る漁獲で、9月以降は急激に減少し、前年及び平年の半分以下の低水準の漁獲が続いた。年間漁獲量は多かった前年の0.5倍であったが、平年の2.2倍と高水準の漁獲であった。マサバは6月に103トンと統計がゴマサバと分離された平成9年以降で最も多く、年間では206トンが漁獲され、前年の1.3倍、平年の3.7倍と近年では好調な漁獲であった。2006年級群は「さばっこ」として6月に600kg、9月に91kgの漁獲のみで、前年の2%、平年の1%と極めて低調であった。また、漁獲されたサバ類のサイズは総じて前年より大型で、多獲された6月のマサバの尾又長のモードは36cm、ゴマサバの尾又長のモードは35cmにみられ、年間を通して2歳魚中心に漁獲された。

カタクチイワシは前年多かった1~2月に少なく4~7月を中心に漁獲され、年間漁獲量は多かった前年の3分の1程度であったが平年並であった。

スルメイカは1月に109トンと集中的に漁獲され、これは昭和57年以降で2番目に多く、前年の2倍、平年の1.5倍の漁獲があった。

その他、マルソウダの漁獲は前年及び平年を下回り、イサキは前年及び平年をやや上回り、ウルメイワシは前年を下回り平年並であった。また、メアジが10~12月を中心に漁獲され、年間漁獲量53トンは昭和62年以降で最も多かった。

静岡県水産試験場のホームページ

パソコンからは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

携帯電話からは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/imode/index.htm>

バーコードリーダー機能のある機種をお持ちの型は、右のQRコードをご利用ください。人工衛星NOAAによる海面の水温分布画像を見ることができます。



お願い: このQRコードは全ての機種で動作を検証したわけではありませんので、ご利用いただけない場合もあります。また、携帯電話によっては画像等が正常に表示できない場合もあります。ご了承ください。